

令和7年度 関西大学まちづくり研究報告会
内海朋基 大野市地方創生アドバイザー 総括コメント

アドバイザーの内海でございます。

北詰先生はじめ、関西大学の学生の皆さん、そして我らが三浦紋人君をはじめとした関大OBの皆さん、本日は有意義な活動報告をありがとうございます。

一月ほど前、県立大野高校で貴重な歴史資料が発見され、久しぶりにクローズアップされた「洋学館」ですが、ご承知のとおり、緒方洪庵「適塾」の高弟、伊藤慎蔵を教授として招き、風雲急を告げる幕末、1856年に、ここ大野の地に藩校として開設されました。全国各地から、数十名の若者が馳せ参じ、来るべき激動の時代に向けて、心血を注いで切磋琢磨したわけであります。

その時から160年後、今から10年前の2016年11月、当時の関西大学学長、楠見先生が大野を訪問され、岡田元市長との会談、合意を経て、関西大学と大野市との、このコラボレーションがスタートしました。様々なハードルを乗り越え、試行錯誤を経て、今ではここ大野の地に全国から学生の皆さんが集結され、我々の社会が抱える課題の解決に向けて、取り組んでいただくようになっております。このように、外部から優れた人材を迎え入れ、活動の場を提供することも「外に向かって開かれた大野」という言葉が意味する一つの側面であります。

同じ幕末、大野藩では、蝦夷地や北蝦夷地（現在の樺太）の開拓に向けて洋式帆船「大野丸」を建造し、また、幕臣の内山良休を中心に「大野屋」という商社を全国 30 数か所に開設いたしました。面谷鉦山の銀や銅、生糸や紙などの大野の産品を、大野丸で各地の大野屋に運んで販売し、膨れ上がっていた藩の借金を完済するという、大きな成果をあげております。

このように、外に向かって大野の人材を送り出し、広い世界で活躍して貰うことも「外に向かって開かれた大野」という言葉が持つ、もう一つの側面であると考えられます。

私と大野市との付き合いも 12 年を超えますが、「外に向かって開かれた大野」という言葉が意味する、この二つの側面が、よその土地では中々見ることのない、大野市独自の魅力であり、大野のパワーともなっているのではないか、最近、私はそのように受け止めております。

400 年を超えて連綿と続く、大野の歴史や大野人の個性を、誇り高く守り育てて来られた一方で、外部からの人材を大らかに懐に受け入れていく「大野の風土」にこそ、多くの人々を魅了し、引き付け、多くの大野ファンを作っていく要因があるのだと思います。

昨年の夏、有名アーティストのミュージックビデオの舞台として阪谷地区をはじめ多くの大野の景観が選ばれ、また、その聖地巡礼で沢山の方々が大野に押し寄せて来られたことも、決して単なる偶然ではなかったと私は思います。

関西大学と大野市とのこのコラボレーションを、今後一層進展させ、深めていただくとことで、この「外に向かって開かれた大野」の魅力を益々高めていただきますようお願い申し上げまして、私の総括のコメントとさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。